

追悼 矢作三藏先生

武田 千枝子

矢作先生の突然の訃報が届いたのは、5日後には2年間の主任の任期が終るという日の朝であった。緊張の糸が切れたということなのでしょうかと話される奥様の落ち着いたお声に、こちらの方が驚き、どう対応すべきか一瞬、戸惑うほどであった。繊細な神経の持主でいらしたから、重責を担われた2年間はかなりの緊張の連続であったろうと思われる。その前年の夏には、ここ数年打ち込んでおられたホーソンとその周辺の作家の交流に関する資料蒐集のため、ボストンを訪れる予定であると知らされていたので、秋にその成果をお尋ねしたところ、都合で取り止めた、といともあっさり仰しゃった。不審に思いながらも、それ以上お尋ねすることはしなかったのだが、ひところより、お目の異常を訴えておられたので、体調を崩されたのであったかもしれない。

先生は修士課程修了後、2年間、学科の助手として勤務ののち、高知大学、山梨大学で教鞭をとられた。中央から遠く離れた土地での20年ほどの期間は、研究に専念するにはまたとない時間であったに違いない。テキストに深く切り込む精緻な分析による『アメリカ・ルネッサンスのペシミズム』がそこから生まれ、母校の教授に招聘されることになった。近年、先生はその著書について、あれは若い時だからこそ可能であった方法だ、次は作家の伝記面にも目を向けてゆくと言われていた。ボストンへ足を運ばれたのはそのためであるから、その完成をみないうちに逝かれたのはさぞ無念であったろう。

先生のお仕事の出発点であり、中心であったのは、ホーソンを中心とするアメリカ・ルネッサンスの文学研究であるが、関心は広範囲に及んでいた。大学における英語教育もそのひとつで、母校に戻られた平成10年直後、英米文学科1年生の語学ラボラトリーの授業の実を一層挙げるべく、運営の改変に乗り出され、授業時間を二分し、学生の能動的学習と、教師によるその成果の確認とにあてることにされた。そのための教科書を自身で作成され、授業時数の増加分も負担された。教科書執筆は学内用だけでなく、出版社からの依頼も数多く寄せられていた。

学外での活動にも積極的で、特に日本ナサニエル・ホーソン協会の役員として、その活動を支えられ、先生の個人研究室に協会の資料室が置かれていた時期がある。

先生は学習院大学出身者として母校に対して果たすべき役割を自覚しておられた。それ

は母校に対する深い愛着に根差したものであった。平成 13 年、学科創設 50 年記念の英文学会会員名簿作成の折には、準備委員の卒業生に助力を惜しまれることはなかった。また平成 15 年 4 月より 19 年 3 月までの 4 年間、学校法人学習院の企画部長・常務理事として務めを果たされたことも、ひとえに母校に対する愛校心が支えになっていたと言える。

同僚としての約 10 年間、特に私が学科主任を務めた際には随分、支えて頂いた。20 年ほど前から先生と始めた勉強会の成果を形にする作業も残ってしまった。なんとしても早いうちに仕上げなければならない。野町先生の墓参のお約束も果たされずじまいである。強いて言えば、松花堂昭乗に先立たれた小堀遠州の口惜しさにも似た気持ちを、今は味わっている。

(学習院大学 名誉教授)